

筆者の地元である新潟県村上市の村上大祭は、新型コロナウイルスの感染拡大により2020年・2021年の開催中止を経て、2022年の3年ぶりに開催された。村上大祭以外にもこのような状況に置かれた伝統行事は多いのではないかと考えた一方で、地域の伝統行事は新型コロナウイルス感染予防対策とどのように両立していくのかという疑問が生じ、本研究のテーマに設定した。

本研究では、新潟県村上市の村上大祭を主な事例とし、開催状況や感染予防対策をその他の地域の伝統行事とも比較し感染者数の推移を見ていくことで、開催状況や感染予防対策の妥当性を検討し、今後コロナ禍でどのように伝統を継承していくべきかを明らかにする。

村上大祭と、阪急交通社による2022年開催予定の祭りの知名度アンケートより上位5つの祭り（青森ねぶた祭・阿波おどり・祇園祭・仙台七夕まつり・よさこい祭り）を対象とし、これまでの開催状況・2022年開催の感染防止対策や当日の様子・感染者数の推移を主に比較した。地方自治体のホームページや観光協会のホームページ、新聞社・テレビ局の記事などから情報を収集した。比較をしたことで、主に開催形態そのものの違いによる感染のしやすさ・感染防止対策の周知の方法・マスク着用の強制度合に違いが見られた。また、感染者数については伝統行事の開催期間付近で大きく推移したものと、そうでないものがあった。

新型コロナウイルス感染のリスクを負ってまで伝統行事を開催する大きな理由として、伝統継承があると考えた。披露したり人に教えるような機会がなければ、これまで身につけた所作や知識も徐々に忘れてしまうため、活動の機会をつくる必要がある。また、伝統行事に参加し、幅広い年代の人々と関わることで、担い手としての意識が芽生えていくため、開催することに意義がある。しかし、コロナ禍での開催は感染リスクもある上に予防対策の経費もかかるため、公的支援を利用しつつ、可能な範囲で伝統行事の活動を続けることが、伝統継承の第一歩となると考えた。